

古代吉備文化財センターに遺る戦争遺跡 一旧吉備修練道場大講堂の特徴と性格一

尾 上 元 規

1 はじめに

吉備修練道場は、昭和17（1942）年、中堅的人材の育成と心身鍛練を目的として⁽¹⁾岡山県により設立された。施設のうち大講堂とそれに接続する渡り廊下は、現在も岡山県古代吉備文化財センター敷地内（岡山市北区西花尻1325-3）に残されており、時代を象徴する戦争遺跡として、また急速に失われつつある近代建築のひとつとして、価値のある文化財といえる。

当道場については、難波俊成氏が建設の経緯や沿革、時代背景等についてまとめている（難波2000）。幼少期を道場で過ごしたという氏の著作は、古写真を交え、当時の新聞記事も詳細に調査されており、施設の沿革のみならず修練や生活の様子をうかがうことのできる貴重な資料である。一方、建築遺構としての調査は、岡山県教育委員会によって行われている。平成15・16年度の近代化遺産総合調査で一覧表に掲載され（岡山県教育委員会2005）、22～24年度の近代和風建築総合調査では現地で詳細調査がなされた。現存建築物の計測、平面図作成、写真撮影などが行われ、その成果が公表されている（岡山県教育委員会2013）。

近代和風建築調査期間中の平成23年、経年劣化により大講堂の屋根の一部が崩落、25年度に修理が行われた。調査報告書には掲載されなかったが、こうした損壊、修理、改修の履歴を含め、現時点での基礎的なデータを記録しておく必要を感じたことが、本稿執筆のきっかけである。難波氏の著作（難波2000）や既調査報告（岡山県教育委員会2013）、各種資料（岡山県教育委員会1974・1983、岡山県教育史刊行会1961）と重複する内容もあるが、それらを参考にしつつ、施設及び建築の概要をまとめ、その特徴と性格について考えてみたい。

2 施設の沿革と概要

建設に至る経緯

昭和12（1937）年の盧溝橋事件を契機として始まった日中戦争は、長期化と行き詰まりをみせたが、日本は一

連の戦争によって得た中国大陆での権益に固執するとともに、新たな勢力圏を東南アジアに求めた。このような動きを警戒するアメリカ等との対立が深まる中、昭和16年12月、御前会議において対米英蘭開戦を最終決定し、英領マレー半島への上陸と米真珠湾等への攻撃を決行、アジア・太平洋戦争に突入することになる。

その間、国内では『国体の本義』発行（昭和12年）、国家総動員法公布（13年）、産業報国連盟発足（13年）、国民徴用令公布（14年）、大政翼賛会発足（15年）、『臣民の道』発行（16年）など、総力戦体制の整備とそのため精神教育が推し進められた。岡山県でも、昭和14年に県産業報国会連合会が結成され、同年着任した熊谷知事は、県民の精神鍛錬を奨励し、修練道場の開設が構想された。さらに「紀元2600年」記念事業としての位置づけも加わり、吉備修練道場の建設計画が具体化した。

道場の建設候補地としては、当初、三徳塾（岡山市東区竹原）、御陵前（岡山市北区西花尻）、閑谷学校付近（備前市閑谷）、曹源寺（岡山市中区円山）の4か所が挙げられたが⁽²⁾、最終的に御陵前に決定した。「御陵」とは、孝靈天皇の皇子、大吉備津彦命の墓と伝える⁽³⁾中山茶臼山古墳（第1・2区）であり、選地が時代背景や施設の性格を物語っている。

その場所は、古代備前国と備中国とを分ける吉備中山の中腹にあり（第1区）、一連の山塊には中山茶臼山古墳以外にも、矢藤治山古墳、尾上車山古墳といった著名な古墳が分布する。また、北西麓の吉備津神社（備中国一宮）、北東麓の吉備津彦神社（備前国一宮）をはじめ山麓には多数の寺社が鎮座し、道場の東約600mの場所には昭和49年に黒住教本部が移された。古くから現代にいたるまで、人々の信仰を集める霊山である。

道場の建設は、総工費188,320円を投じ、昭和15年9月に着工、翌年末には第一期工事が完成し、昭和17年2月に開講式が行われた。大講堂は同年10月末に完成、11月7日に落成式が挙行されている。竣工時の敷地はおおよそ9,400坪で、うち7,700坪を三段に整地して、大講堂、小講堂、本館、図書館、食堂、潔斎所、宿舍、官舎の8



第1図 旧吉備修練道場の位置 (1/35,000)



第2図 「御陵」(中山茶臼山古墳)

棟を建設し、総建坪は503坪に及んだ。大講堂は現存、小講堂（現存せず）は現文化財センター本館の北西部分に大講堂と平行して建てられ、渡り廊下（現存）で両者が繋がれた。道場の本館は、現駐車場の位置に南北棟で建てられたようである。また、それより下の段には図書館以下5棟の施設が建ち⁽⁴⁾、竣工時の写真（板谷写真館1942）や除却前の写真（岡山県教育委員会1983）から、いずれも木造平屋建、切妻造、瓦葺の和風建築であったことがわかる。

道場での講習会は、県庁職員、青少年団幹部、学校教職員、産業報国会、その他各種団体職員等を対象として、道場の廃止までに計203回開かれ、受講者の総数は8,000名にのぼったという。初代道場長の平松菊郎氏（倉敷高等女学校長）が編集した『錬成教典』がテキストとして用いられたようであり（平松編1942、第4図）、「御陵」

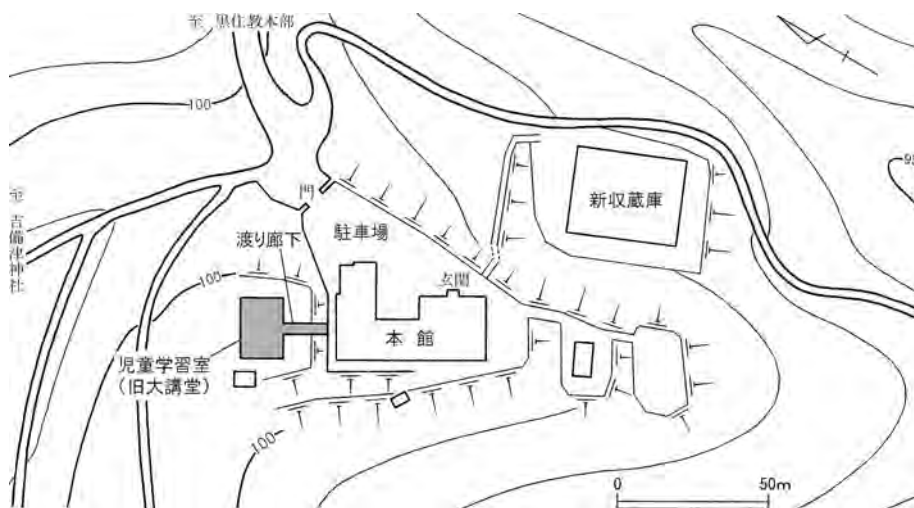
への参拝も修練のメニューのひとつであった（難波2000）。

廃止とその後

昭和20年8月に終戦を迎え、翌年2月、吉備修練道場は廃止、改組され、県吉備青年興農塾が設置された。その後、県中央公民館（昭和22～38年）、県吉備青年の家（昭和38～58年）を経て、昭和59年11月、県古代吉備文化財センターが設立された。当センターの開設に先立って大部分の建物が取り壊され、敷地内最高所に建つ大講堂と渡り廊下のみが残された。その保存については地元の要望もあったと聞く。当センターは、県下の埋蔵文化財調査・保護・活用のための拠点施設として機能しており、旧大講堂は「児童学習室」として、現在も講座や体験教室などに使用されている⁽⁵⁾。

被災・修理・改修

現存する旧大講堂及び渡り廊下は、建築から80年近く



第3図 文化財センター周辺現況略図 (約1/2,500)



第4図 『錬成教典』

第1表 被災・修理・改修歴（記録を確認できたもののみ）

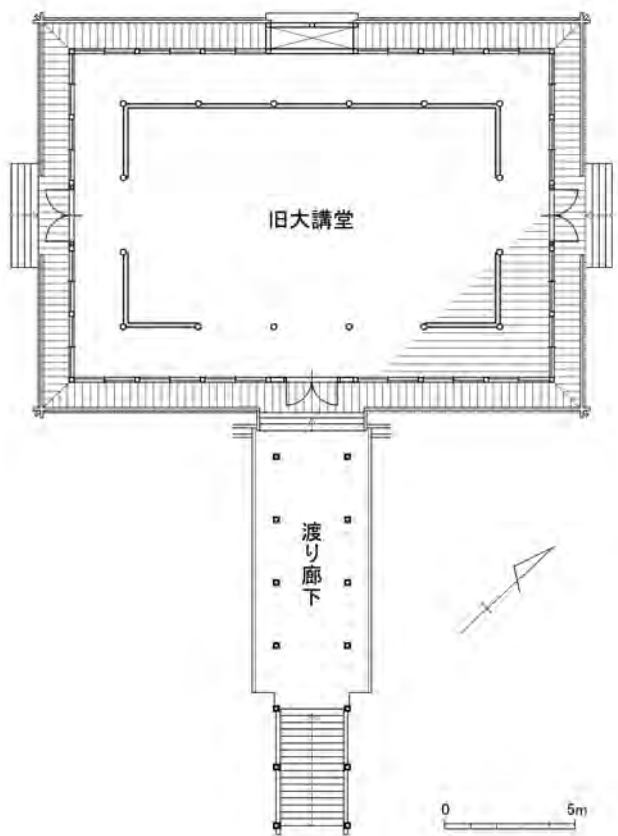
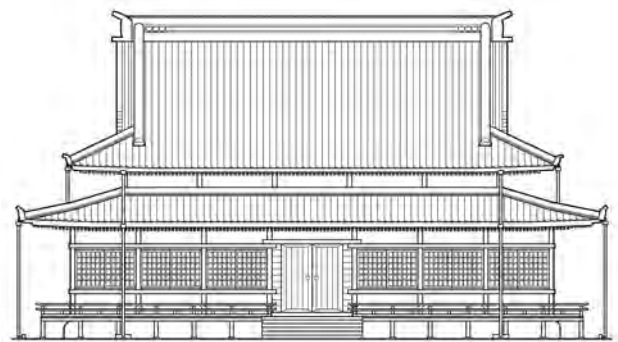
年度	内 容
昭和41（1966）	大講堂屋根瓦の全面葺き替え
昭和43（1968）	全建物の雨樋取り替え
昭和54（1979）	大講堂修繕（内容不明）
昭和55（1980）	大講堂避雷針工事
昭和56（1981）	大講堂高欄取り替え
昭和57（1982）	台風13号により大講堂屋根被災、復旧工事
昭和59（1984）	古代吉備文化財センター開設に伴う改修 大講堂瓦葺き替え、天井張り替え、間仕切り壁設置など、渡り廊下瓦葺き替えなど
平成23（2011）	大講堂大屋根南隅部が経年劣化により崩落、鉄板による応急処置
平成25（2013）	大講堂大屋根南隅部の垂木・隅木・野地板等交換・復旧、瓦全面葺き替え、雨樋取り替え、前面階段修理 渡り廊下の腐朽部材（梁・桁・柱・垂木・野地板等の一部）交換、瓦全面葺き替え

が経過しており、その間に幾度もの修理・改修が行われてきた。古い時期の記録は確認が困難だが、青年の家時代については記録がある（岡山県教育委員会1983）。昭和41年に大講堂屋根の全面葺き替えが行われたほか、昭和50年代後半を中心に度重なる修繕工事が行われている。その後は、昭和59年当センター開設時の改修と、平成23年の大講堂大屋根崩落及びそれに伴う修理が主なものである（第1表）。昭和59年の改修では、大講堂内部が大きく改変されている。

3 建築の概要（第5・6図）

旧大講堂

敷地の最高所、標高約100mの地点に、南東向きに建てられている。木造平屋建、入母屋造、棧瓦葺で、桁行7間（18.45m）、梁間5間（12.64m）、建築面積236.48㎡の規模である。仏殿を思わせる外観で、屋根を二層形式とし、拝みには懸魚を下げる。瓦はこれまでに数回の全面的葺き替えがなされている。その結果、鬼瓦は数種類が混在していたが、平成25年度の修理時に経の巻に統一された。古写真（板谷写真館1942）においても、確認できる範囲はすべて経の巻である。軒裏は、上層が一軒、下層が二軒の繁垂木で、化粧垂木、隅木等の小口面を白く塗色する。組物はなく、柱の上に舟肘木をのせ桁を支える簡素なつくりである。外壁は真壁おさめの漆喰仕上げとするが、現在はその大半にボードが張られている。正面及び両側面の三方中央には木製の重厚な両開き戸を設け、それ以外のほぼ全周に引き違いのガラス障子窓を配す。ガラスの所々に「公」の文字が書かれているのは、中央公民館時代の名残であろう。四周には切目縁を廻ら



第5図 旧大講堂及び渡り廊下の立面・平面図（1/300）



旧大講堂・渡り廊下全景（東から）



旧大講堂（南から）



旧大講堂背面（北西から）



旧大講堂軒裏



旧大講堂亀腹



旧大講堂内部（南から）



渡り廊下（南から）



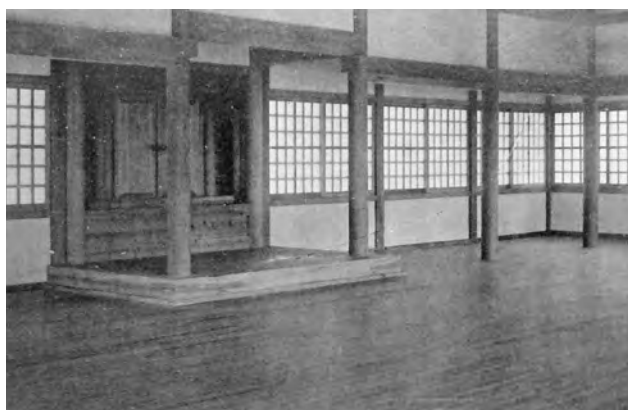
渡り廊下内部（北西から）

第6図 旧大講堂・渡り廊下の現況

し刃高欄を付すが、この高欄は昭和56年に取り替えられたものである。床下にはコンクリート造漆喰仕上げの亀腹を設け⁽⁶⁾、その上に土台を置く。三方の出入口外面には人造石研ぎ出し仕上げの階段を付し、正面中央の階段から渡り廊下に接続する。屋根には軒樋を設け、豎樋を経由して石組の排水溝に注ぐ。樋は塩化ビニル製に交換されているが、現状と同様の配置をとる樋と排水溝が古写真（板谷写真館1942、難波2000）にみえる。

内部は、内室と入側に分けられ、その境に16本の丸柱を廻らせるのが特徴で、内観の見どころといえる。入側柱の柱間には小壁が付くが、鴨居から下は開け放たれ、床も連続した板張りで敷居を入れず、一体的な大広間としている。ただし、現在は一部を除き入側柱に沿って間仕切り壁が設置されている（昭和59年改修）。内室と入側は天井高に差を付けており、現状で内室の方が約80cm高いが、昭和59年改修時の「既存大講堂内部断面」図では内室天井高5.1m、入側天井高3.4mで、その差は1.7mある。この時の改修で内室天井は軽量鉄骨下地のボード張りに改変されており、天井高を大きく下げたことがわかる。壁は真壁おさめの漆喰仕上げであったが、現在は全面にボードが張られている。

また、室内の奥（北西）側中央を外に突出させ、間口1間（3.34m）、奥行半間（0.98m）の小空間を設けているが、現在は封鎖されており内部の確認ができていない。竣工時の写真（第7図）によれば、窓の高さに両開きの扉を設け、その前面の入側部分は幅1間、奥行1間の床を一段上げて上段の間としている。講堂建築であることや設置位置、時代背景などを考えると、奉安殿であった可能性が高い⁽⁷⁾。



第7図 大講堂竣工時の内部

小屋組は、トラス構造で近代の特徴を示し、これによって室内の大空間を実現している。

渡り廊下

旧大講堂と小講堂（現存せず）とを繋ぐ渡り廊下である。木造平屋建、切妻造、棧瓦葺で、桁行6間（14.2m）、梁間1間（2.73m）、建築面積38.8㎡の規模である。斜面にかかる階段部分2間と平面部分4間からなり、階段部分の高低差は約2.5mある。床はコンクリート打ちとし、壁はなく吹放ちで、天井も張らず小屋組、垂木を現す。妻の拝みには懸魚を下げ、木鼻や持送り板に彫刻を加えるなど、社寺建築を意識した意匠をもつ。垂木は疎垂木で、垂木や木鼻の小口面を白く塗色する。なお、著しく傾斜する階段部分の屋根は、北東面と南西面で使用する棧瓦を変えている。上方から下方へ雨水が流れるため雨仕舞いを考慮し、南西面にはいわゆる逆棧瓦を用いている。昭和59年改修時の「既存渡廊下平面図」にも「反対袖瓦」の記載がある。平成25年度の改修時に瓦の葺き替えがなされたが、この部分は旧状に倣って逆棧瓦葺としている。

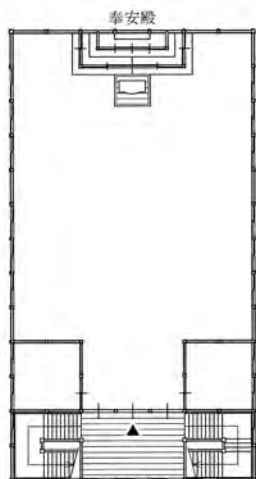
4 建築の特徴

近代講堂建築との比較

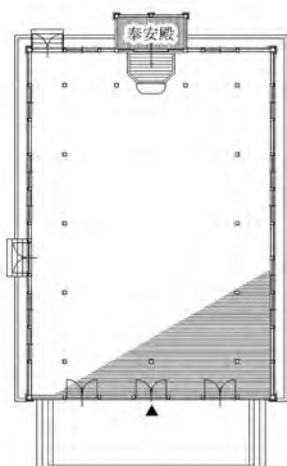
以上、旧吉備修練道場の施設と、現存する建築の概要についてみてきたが、ここで大講堂（以下「吉備講堂」という）について、他の講堂建築との比較を行い、その特徴や性格を考えてみたい。

近代の講堂建築は、明治後期に学校施設として建てられたものが多く残されている。校舎の二階に講堂を設置する例が多く、県内では真庭市旧遷喬尋常小学校校舎（明治40年、国指定重要文化財）、高梁市旧吹屋小学校校舎本館（明治42年、県指定重要文化財）、同市旧高梁尋常高等小学校本館（明治37年、現高梁市郷土資料館、市指定重要文化財）などがある。また、校舎とは独立した講堂として建てられたものに、浅口市旧金光中学校講堂（明治37年、現金光学園中学高等学校記念講堂、登録有形文化財）や津山市旧津山男子尋常高等小学校講堂（明治36年、現大隅神社昭徳館、市指定重要文化財）などがある（第8図）。校舎の二階に設けられたもの、独立したものを問わず、室内に大広間を有し、折り上げ格天井など社寺建築風の要素を備える一方、外観では下見板張

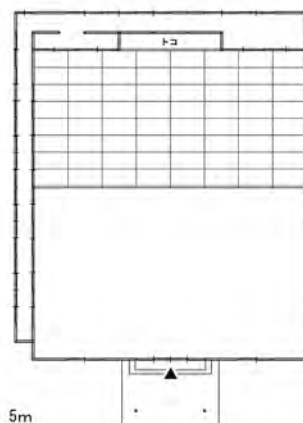
旧高粱尋常高等小学校本館(2階)



旧金光中学校講堂



旧津山男子尋常高等小学校講堂
(昭和3年増築部分を除外)



第8図 近代の学校における講堂建築 (1/400)

りにペンキ塗りの外壁、ドーマーウィンドウ形屋根飾りなど洋風意匠をもつ事例が多い。旧津山男子尋常高等小学校講堂は、内部を畳敷きとし床の間を備える点や車寄せの意匠など和風の色彩が強いが、下見板張りの外壁に縦長の窓を配する点などは洋風な要素であろう。また、これらの講堂はいずれも入口からみると奥に長い縦長の平面形としている。

吉備講堂は、これら近代の講堂とはやや年代の開きがあるが、建築の特徴においても一線を画している。屋根

を入母屋造として和風を強調し、平入り、横長平面の大規模な建築で特に正面の存在感が大きい。このような外観や、次にみる平面構成の特徴は、上記の近代講堂建築よりも、近世の広間型講堂、特に旧閑谷学校講堂との共通点が多い。

旧閑谷学校講堂との類似

閑谷学校は、寛文10（1670）年に岡山藩が創設した庶民教育のための郷校で、国宝に指定されている講堂（以下「閑谷講堂」という）は、元禄14（1701）年の改築に



第9図 旧閑谷学校講堂

なるものである（第9図）。木造平屋建で、屋根は入母屋造の鍔葺とし、瓦は備前焼の本瓦を用いている。桁行7間（19.4m）、梁間6間（15.6m）、建築面積302.64㎡の規模で、内部は、内室の四周に入側と廻縁を配し、広間型講堂の典型例とされる（箱崎2011）。内室と入側の境には10本の丸柱が廻り、柱間装置として漆喰塗りの小壁を入れるがそれ以下は吹き放ちとし、床には無目敷居を入れるが内外の板敷きと面をそろえており、内室と入側は一体的な大広間を構成している。

吉備講堂の平面構成は、このような近世の広間型講堂とよく似ている。内室－入側一縁という求心的三重構造、さらに、内室と入側の境に柱を廻らせながら両者が一体的な大広間をなすという共通点である（第10図）。閑谷講堂とならぶ近世広間型講堂の現存例としては、旧津藩支校崇廣堂講堂（三重県）や旧庄内藩致道館講堂（山形県）、旧彦根藩弘道館講堂（滋賀県）などが著名だが、これらはいずれも内部が畳敷きで入側柱を角柱とする。したがって、板敷きで丸柱を採用する吉備講堂は閑谷講堂に最も近似するといえる。外観においても、大規模な入母屋造とする点や、正面及び両側面（閑谷講堂は四面）

中央に扉と階段を設ける点⁽⁸⁾、壁面のほぼ全周に窓（閑谷講堂は火灯、吉備講堂はガラス障子）を配し開放的な空間とする点などが共通し⁽⁹⁾、全体の規模も近似する。吉備講堂の建設にあたっては閑谷講堂がモデルとされた可能性が高い⁽¹⁰⁾。

近代の特徴

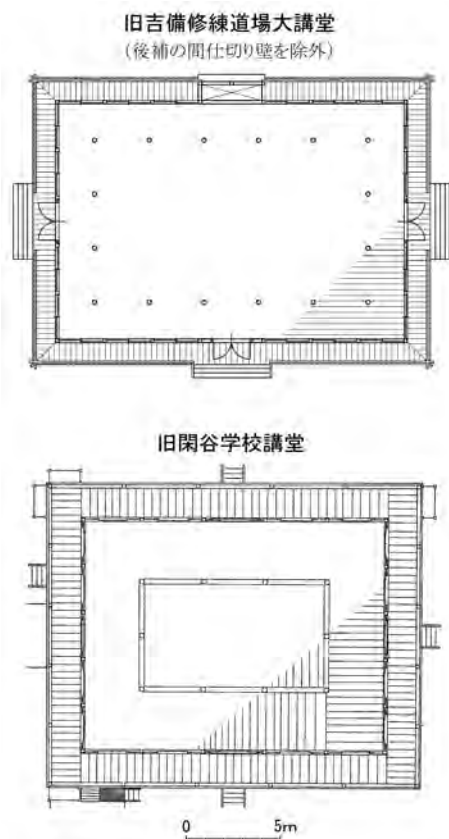
一方、吉備講堂は閑谷講堂と異なり、近代の特徴もあわせもつ。近代の新しい建築材料として、亀腹や階段、渡り廊下の床に使用されたコンクリート及び人造石、窓に用いられたガラスなどが挙げられる。また、小屋組はトラス構造とし、内室は閑谷講堂よりも広く柱のない大空間を実現している。近世の講堂に倣った復古的意匠ながら、技術面では近代化が進んでいるのも吉備講堂の大きな特徴といえる。

5 おわりに

吉備修練道場の建設計画が具体化してきたのは昭和14年頃と思われるが、その直前の13年、旧閑谷学校の主要な建造物が国宝保存法により指定された⁽¹¹⁾。吉備講堂の建設にあたって、国宝として名高い閑谷講堂がモデルとされた可能性は十分に考えられる。道場の当初候補地のひとつに閑谷学校周辺が挙げられたことも、このような事情と関連があるかもしれない。

しかし、閑谷講堂をモデルにした理由はそれだけではなかろう。吉備講堂の建設にあたっては、洋風意匠を多用する近代の学校講堂建築を避け、和風を強調した復古的な建築としており、そこには時代背景が影響している。日露戦勝（明治38年）以降、日本人の精神的優位性や「日本精神」をことさらに強調する風潮が生まれ、日中戦争が始まるとそのイデオロギーは拡大した。「紀元2600年」の奉祝式典や記念行事においても愛国心の高揚が図られ、翌年に文部省が刊行した『臣民の道』は、欧米の文化、思想の弊害を強調する。吉備講堂の計画、設計も、このようなナショナリズムの興隆の中でなされたものと理解できよう。

修練道場及び類似施設開設の動きは全国的なものであったというが、現存するものは数少ない。現在、吉備講堂は文化財保護法や条例に基づく指定、登録がなされていないが、今後も適切な保存管理と活用が望まれる。



第10図 吉備講堂と閑谷講堂の比較（1/400）

註

- (1) 「吉備修練道場錬成綱領」に次のようにある（平松編1942から引用）。
 - 一、聖旨ヲ奉體シテ皇道ヲ宣揚シ國體ノ本義ニ徹シテ確固タル國民的信念ヲ長養シ以テ臣道實踐ニ挺身スベキ中堅人士ヲ育成スルコト
 - 一、皇國臣民タルノ矜持ト感激トヲ以テ和衷戮力大東亞共榮圈確立ノ大業翼賛ノ先驅者タルノ心身ヲ錬成スルコト
 - 一、自我功利ノ思想ヲ排シ國家奉仕ヲ第一義トスル皇國臣民ノ道ヲ昂揚實踐セシムルコト
- (2) 三徳塾は、農業従事者の技能育成を目的として昭和9年に矢野恒太氏により設立され、昭和14年、岡山県に譲渡されている（現県立青少年農林文化センター三徳園）。曹源寺は、旧岡山藩主池田家の菩提寺で、その境内は池田家墓所として史跡に指定されている。御陵、閑谷学校は後述の通りである。
- (3) 明治7（1874）年に治定、現在宮内庁の管理下にある。
- (4) 旧吉備青年の家（昭和38～58年）のさつき寮、松風寮、若草寮、食堂、浴場の5棟（第11図）が、修練道場の図書館、宿舍、官舎、食堂、潔斎所に概ね該当すると思われるが、改造、移築等の記録もみえ（岡山県教育委員会1983）、詳細は不明である。
- (5) 講座などの行事で使用しているが、通常は非公開である。
- (6) 大型木造建築で亀腹など基礎まわりをRC造とする例として、近隣では吉備津彦神社本殿（昭和11年）がある。
- (7) 奉安殿は、近代に主として学校教育で使われた施設で、下賜された御真影と教育勅語が収められた。『錬成教典』



第11図 旧吉備青年の家の施設配置

（平松編1942）にも教育勅語が収載されている。

- (8) 閑谷講堂西面中央には、習芸斎及び飲室に至る釣屋が接続するため、木階はやや北側に寄せて設置されている。
- (9) 縁については、閑谷講堂がその外周に雨戸を立てて内部に取り込むのに対し、吉備講堂は濡れ縁とする点で違いがある。
- (10) 吉備津神社本殿に似せてつくられたとの話も伝わっているようだが（岡山県教育委員会1983）、建築の共通点は多くない。高低差のある渡り廊下の建設にあたっては、あるいは吉備津神社回廊がイメージされたかもしれない。
- (11) 戦後、昭和25年の文化財保護法施行に伴って重要文化財となり、講堂は昭和28年に再び国宝に指定された。

参考・引用文献

- 板谷写真館1942『皇紀二千六百二年 吉備修練道場落成記念』（10枚組絵葉書）
- 岡山県教育委員会1961『特別史蹟並びに重要文化財閑谷講堂外四棟保存修理（第一期）工事報告書』
- 岡山県教育委員会1974『岡山県教育史』続編
- 岡山県教育委員会1983『吉備青年の家四十年の歩み』
- 岡山県教育委員会2005『岡山県の近代化遺産—岡山県近代化遺産総合調査報告書一』
- 岡山県教育委員会2013『岡山県の近代和風建築—岡山県近代和風建築総合調査報告書一』
- 岡山県教育史刊行会1961『岡山県教育史』下巻
- 難波俊成2000「吉備修練道場の成立から終焉」『岡山の記憶』第2号 岡山・十五年戦争資料センター
- 箱崎和久2011『日本の美術』第538号 ぎょうせい
- 平松菊郎編1942『錬成教典』吉備修練道場

図出典（下記以外は、当センター所蔵資料のほか、筆者の作図・撮影等による。）

- 第1図 国土地理院1/25,000地形図「総社東部」「倉敷」に加筆
- 第5図 岡山県教育委員会2013ほかを改変
- 第7図 板谷写真館1942
- 第8図 岡山県教育委員会2013を改変
- 第10図 岡山県教育委員会1961・2013を改変
- 第11図 岡山県教育委員会1983を改変